

## 8. (L) 唾液腺・消化器

### (311-314)

311~313 席は、唾液腺に関するものであった。

中西ら(信大・放)は $^{99m}\text{TcO}_4^-$ の局所動態にもとづいた唾液腺の functional image を考案し、シンチフォトと functional image の併用により、腫瘍の局在部位を明らかにすることが可能であることを述べた。検出能の向上が期待され有用な検査法であると思われた。

曾根ら(川崎医大・放)は $^{67}\text{Ga}$ と $^{99m}\text{TcO}_4^-$ によるシンチグラフィおよび分泌機能検査を併用する方法を行い、腫瘍の良性、悪性の鑑別に有用な手段であることを報告した。病理組織診断の域にまで及ぶ検査方の確立を期待したい。

高木ら(慶大・放)はシュグレン症候群に経時的な唾液腺シンチグラフィを行い、唾液腺機能の定量的評価を試みている。各種のパラメーターを対比することにより、機能障害の程度の把握を行い、本法が治療効果判定ならびに経過観察に有用であることを述べた。臨床的に意義のある報告であり、今後大いに期待される。

高瀬ら(日本医大、新潟歯・放)は頭頸部の放射線治療後の症例に $^{67}\text{Ga}$ シンチグラフィを行い、 $^{67}\text{Ga}$ の集積の程度と線量の関係について報告した。頭頸部腫瘍の放射線治療を行うと、唾液の分泌障害で悩まされることが多い、これらの症例の分泌能回復の予後判定として、 $^{99m}\text{TcO}_4^-$ による唾液腺シンチグラフィの定量的評価等、唾液腺の分泌機能の RI 検査については、まだまだ検討する余地があると思われる。さらに、よりよい診断法の確立が望まれる。

(熊野町子)

### (315-318)

315~318 の4題は消化管機能(吸収、運動)に関するものであった。この領域は核医学の中で取り残された分野の一つである。

315, 聖マ医大鈴木らは $^{13}\text{C}$ -グリココール酸(GC) 500 mg 経口投与後呼気中の $^{13}\text{CO}_2$ を赤外線分光計を用いて測定することにより、腸管内における GC 脱抱合を推測できることを報告した。ileal bypass によるミセル形成不全の吸収不良症候群症例を例示し、赤外線分光計による $^{13}\text{C}$ 呼気テストが吸収不良症候群の病態診断に有用であると述べた。stable isotope が RI に代わって人体における吸収や代謝のトレーサーとして広く用いられるようになってきた。

316, 東邦大1内野口らは $^{99m}\text{Tc}$  Sn-コロイド 0.4~1 mCi をオレンジジュースと混和して服用させた後に座位で10分間撮影し、食道への逆流を検することにより、逆流性食道炎の核医学検査を行った。発表をみた限りでは陽性例が1例のみであったが、今後他の検査、たとえば通常の経口バリウムX線造影法や内視鏡検査、さらにできれば食道内圧測定法などとの比較検討が望まれる。

317, 近畿大熊野らは $^{99m}\text{Tc}$  Sn-コロイド 1 mCi をボンコロシ食用 100 g とともに与え、摂食直後より30分間の time activity curve より T 1/2 を計算し、slow (S) 型, delayed (D) 型, rapid (R) 型に分類した。この方法により食道癌再建胃管の機能を検査し、再建術式別に論じた後縦隔群では S 型, 胸骨後群では D 型, 胸骨前群では R 型がそれぞれで多くみられた。

318, 奈良医大がんセンター芝辻らは $^{111}\text{In}$ -DTPA 200  $\mu\text{Ci}$  と $^{99m}\text{Tc}$ -DTPA 2 mCi との dual RI 法で胃排出時間測定を行うための条件をカメラ window 幅, アクリル板散乱体の厚さ, おおのの投与量などにつき種々検討した。2種類の RI をそれぞれ固体相と液体相として、両様の混合食事の胃排出時間を測定する方法であり、興味深い。

(細田四郎)